



研究者という職業

先日、男子小学生の将来なりたい職業ランキングで研究者が第二位に入ったというニュースを目にした（なお第一位はダントツでスポーツ選手でした）。これも毎年のようにノーベル賞受賞者が輩出されることや諸先輩方の様々な啓蒙活動の賜物なのであろう。研究者を生業とする者の一人として誇らしいニュースである。実際小学生向けの理科教室などが大盛況だとも聞いている。そんな折、小学生になる息子が「父さんは子供の頃、何になりたかったの？」と聞いてきた。何を隠そう、小生は子供の頃から研究者になりたかった。別に大層なエピソードがあるわけでもないのだが、単純に身の回りの未知なるものを解明する研究者という職業に子供じみた憧れを感じていたのだ。ただ血を見るのが大嫌いだったので、生物系には進むまいと心に誓っていた。そんなわけで高校時代までは工学分野の研究者を目指していたのだが、大学入学直前に読んだ利根川進先生と立花隆氏の対談集に感化されてしまった。分子生物学的手法を用いて生命の深淵を明らかにしてきた利根川先生の研究者人生に触れ、生物学こそ未解明分野の宝庫だと思い、苦手意識も忘れ、生物系の研究者になろうと決心、どうにか薬学部に潜り込むことに成功した。4年生になり、研究室配属の時期になると、生来の天の邪鬼な性格が顔を出してきた。時は90年代後半、ポストゲノムの時代で分子生物学は当たり前となった時代である。「今の時代、分子生物学では皆と同じになってしまう。ポストゲノムの時代だから、蛋白質の精製を学ぼう」と生化学の研究室に配属希望を出した。まあ今から思うと浅はかな考えである。研究室では、ある酵素活性を指標にラット肝臓

からその活性を担う蛋白質を精製／同定するというテーマで研究を始めた。ここから一年間は、冷蔵庫の中に置かれた複数のカラムと格闘し、精製された画分の酵素活性を測定するためにRI実験室に独り籠るという生活を朝から晩まで続けた。まあ地味で泥臭い日々である。この作業は永遠に終わらないのではないかとすら思ったが、幸運にもおよそ一年後、活性蛋白質の同定／cDNAクローニングに成功した。そのときの興奮はなんとも表現できないものであった。この研究は順調に進展し、結局は分子生物学的手法も含め、様々な分野を学べることになった。導いてくれた教授、研究室スタッフ、先輩後輩、そして苦楽を共にした同級生には感謝してもしきれない。その後二十年近く研究者を続けてきたわけだが、正直うまくいかないことが大半であり、諸々の事で挫折しかかることは多々あるのだが、こうしためったに訪れない大きな発見ばかりでなく、日々の小さな発見や成功によって科学の深淵の一端を垣間見ることができた（見た気になっただけ？）からこそ研究者を続けてこられたのだと思う。もちろん苦労して書き上げた論文がアクセプトされると報われた気分になるし、業績として研究者を続けられる大きな要因になる。現在ポストや研究予算が不足しており、研究者を取り巻く環境は必ずしも恵まれているとは言えない。それゆえ若者に対して、無責任に研究者を勧めるのは気が引けるのだが、こうした研究者にしか感じられない魅力は伝えたいと思うし、それで研究者を目指す若者が一人でも現れれば望外の極みである。

さて、冒頭の息子との会話に戻る。「ふーん、父さんはなりたいものになれて良かったね。まあ僕はサッカー選手になりたいけど」と息子がぼつり。なりたい職業ランキング第一位にはかなわないらしい。まあ順位はともかくとして、今後も「研究者」という職業が子供達にとって魅力ある職業であり続けることを願いつつ、現役研究者の果たすべき責任の重さを痛感する今日この頃である。

（風来坊）